



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

年間第 32 主日 B 年 (2021 年 11 月 7 日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：列王記上 17 章 10 — 16 節

第二朗読：ヘブライ人への手紙 9 章 24 — 28 節

福音朗読：マルコによる福音書 12 章 38 — 44 節

テーマ：永遠えいえんの今いま

【三つの朗読から】

第一朗読の「わたしのために小さいパン菓子がしを作って、わたしに持って来なさい」(13 節)は、印象的いんしょうてきなひと言です。やもめが提供ていきようできるのは、ごくわずかな小さなパン。しかし、それはエリヤつうを通じてかた語られた神の言葉への応答おうとうとなります。

第二朗読にある小さな言葉「ただ一度」(26 節)に注目あがなしてみましょう。キリストの贖いあがなのわざは、ただ一度のこと。そのただ一度で、すべての人を救うのです。

福音朗読にあるやもめの様子ようすを描写びようしやするイエスさまの言葉「だれよりもたくさん入れた」(43 節)は、イエスさまの観察眼かんさつがんの鋭さすどを示します。明日あしたをも知れぬ困窮こんきゆうの生活の中で、やもめは自分の持っているものすべてを惜しみなくお与えたあたのです。

説教

今週かじよと来週の朗読の箇所はわたしたちの信仰しんじゆに基づく終末観しゆうまつかんと結びつきます。終末、つまり終わりと聞くとずっと先の出来事きと考かんがえがちです。しかし、聖書が示す終末とは「今」です。「今」、この瞬間しゆんかんが終末となります。

大学生ことうの頃、クラスメートの女子学生が話してくれました。「ピアノなを習ならっていたわたしは小学生のある日、今まで体験たいけんしたことの無い特別な体験とくべつをしました。それは、いつものようにピアノなの練習れんしゆうをしていたら、ポーンと鳴らした音が永遠えいえんに続く音つづに聞こえたのです。それは、楽がく

譜が示す音ではなく、深く豊かな音でした。それ以来、その音を求めてさらにピアノの練習に励みました。楽譜通りに演奏するのがよいと思っていたわたしは、あの深く永遠に続く響きのある音を表すために演奏するのだと考えるようになったのです」。

彼女のことばは四十年を経ても忘れられないです。一つの音は、一つの刹那です。刹那と刹那のつながり合いが曲を作っていきます。音は生まれ、音は消えていく。そんな時間の流れの中に音楽はあります。しかし、小学生の時に彼女は出会ったのです。その音が永遠に続くという事実には。

万物は生々流転す、は確かに真実です。万物は生まれ、消えていく。こうして変化していく。しかし、変化の中に生じた「あるもの」は永遠のいのちの中から生まれ、永遠のいのちの中へと消えていきます。

「今」は永遠へと続くのです。今日の福音朗読に登場するやもめは「今」を生きています。明日のことを思いわずらいません。今を生きることは、その場限りの刹那的な生き方のようにも見えます。しかしこのやもめは、神さまへの信頼の中で生きているのです。「生活費の全部を入れた」(44節)とありますが、ギリシア語ではビオスです。この単語には「地上での生活を維持するための財貨」という意味と、「この地上での生活」(生涯)という意味もあります。やもめは自分のいのちを差し出したのです。

【ちょっとひと言】

第一朗読では、エリヤを通して語られる神の言葉に信頼したやもめの姿にスポットライトが当たります。一方、福音朗読では神の言葉(律法)を知りながらも偽善を働く律法学者たちが非難された後で、持っているわずかなものをすべて献げるやもめの姿が印象的です。後がない、一回きりのビオスを献げるやもめの姿は第二朗読の大祭司キリストと結びつきます。第一朗読と福音朗読に登場するやもめと、第二朗読での大祭司キリストには共通するものがあります。それは、神さまに対して信頼する心であり、同時に自分自身のいのちを献げるという惜しみなく明け渡す行為です。